

カトリック教義は日本国憲法に抵触？ ～ 教会文化を育てる上で何が欠けているか

1. 宗教は究極の自己主張を目指す

宗教とは最終的に自己正当化を目指すものであって、指導層は公然とは言わないが「自宗派以外に救い無し」とそう信じている。中世の頃には他宗派は地獄に落ちると公然と宣教していたから、大衆は恐ろしくなって宗教戦争に走った。その頃の考えは潜在的にいまでもバチカンに残っている。キリスト教の歴史においてその事が多くの殉教者を生んだのであって、その殉教者の行為を否定したらキリスト教は成り立たない。余計なことだが、殉教者の数が日本ではローマについて2番目というのは日本人の頑固さを表している面白い。

この究極の自己主張はまた**集団主義**に利用されやすく、ただ生活習慣的に教会に通っていると、「悟り」の為に教会へ行くのか、それともある集団に帰属する為なのか判らなくなって来る。何かそこに問題点がありそうだ。

2. 信仰の自由と婚姻の自由

宗教はその体制を守るために教義をつくる。歴史的にこの教義が問題なのだ。しかし近代国家ではこれらの偏狭な教義から多くの民衆を守るために戦いをなし、民衆を解放した。表記の権利はわが国憲法に明確に規定されている。国民はどの様な信仰を持とうとも、また何回結婚しようとも（同時に何回離婚しようとも）決して非難される謂れはない。

しかしカトリックではその内部活動の様々なレベルにおいて**差別**を設けている。例えば離婚であるが、伊半島では第2バチカン公会議の前には離婚を認めておらず、人々は別居という便宜主義で現実を処してきた。しかし会議後もその悪習は残っている。例えば日本の「カナの会（結婚紹介）」の規約の中に信徒の紹介ならばプロテスタントでも紹介をするが、離婚の条件が加わると紹介はしない（例外として面倒臭い許可が要る）。離婚は教義にとってマイナスであるという考えは払底されていない。これは離婚者の傷口に塩をすり込む様なものだ。

私の家族の場合、妻はミッション系大学の出身なのに日本文化主義者だから「耶蘇教なんて」と言って頭から受け付けない。長男はプロテスタントでバツイチである。そこで二人とも地獄のかなり深い処へ落ちることになっている。自分だけ救われてもしょうがないから一家の主人として地獄へ助けに行く方法を今考えている。妻は何とか亭主を悪夢から覚まさせようと考えているらしい。

3. 「戒律の誤解釈」は地球環境問題の解決を妨げる

集団主義は様々なレベルで構成員の**自由を拘束**する。教会は個人を束縛したりはしません、と司教が公言しても、現実の教会生活のレベルでは、教会の空気が信徒の発言や行為に制約を設ける。制約を課さない戒律など存在しない。最悪の場合、そもそも人間に自由があることなど忘れしまう処まで行き着く。これが現実の地球環境問題の解決ではマイナスに働く。

クールマンはその著書「安全工学」において、環境リスクを下げるために自由がポイント

トだと度々述べている。換言すればリスク対ベネフィット（便益性）とのトレードオフの最適平衡点を求めるために常に自由な行動が必要なのだ。二酸化炭素排出権の市場売買などはこの発想である。規制では十分な効果を挙げられない。例えて言えば自転車のハンドルを固定すれば直ぐ倒れてしまう、これと同じだ。宗教の戒律はこの規制に相当する。

4．それでもイエスと歩きたい。

帰属する集団を批判する者は集団から出て行くのが日本社会の掟である。しかし自分にとって何故カトリックなのか？それは45年前の二つの宗教都市「トリノとパドア」を訪問した時の経験による。人々の気品の高さ、嫌味のなさ、これが同じ敗戦国かと目を疑った。私の友人は本当に困ったときにパドアの篤志家から命を助けられた。隣人を助けるとはこういうことか、と深い感銘を受けた。

日本では余り知られていないが、トリノ近郊からドンボスコ（サレジオ会）という偉大な聖人が出ている。この修道会が日本の中高等教育の発展に尽くした功績は計りしれない。彼らは宣伝しないから一般人はあまり知らない。更には日本の著名な女子修道院もこの地で育ったカトリック文化の流れを引いている。

一方、パドア文化は主にドイツのカトリック文化に多大の影響を与えた。パドア大学に一度でも足を踏み入れた方はその豊かな時間の流れにいっぺんで魅せられてしまう。この地では親日家が多いと聞いている。

ここで強調したいのは、両者は全く異質のカトリック文化体系を発展させたという点である。トリノはローマ文化（とエトルリア文化）に加えてフランス文化の影響を強く受けており、パドアは言うまでもベニスと衛星都市としてヴィザンチン文化を花開かせた。二つは夫々の地域性を生かして独自の教会文化を育んできたのである。

とりわけパドア大学の場合、バチカンから異端とされた科学を擁護し、積極的に著名学者を大学に招聘した。例えば天文学のガリレオ、解剖学の（忘れた！）である。現在でも世界一流の科学者を招聘した上で、内容を吸収し自らの文化圏へ伝えている。

この町の長い歴史を概観すると「異端は即買い」という遺伝子が確かに継承されており、この血は一体何処から来たのだろうか？

5．バチカンの官僚主義

イタリア人は自由奔放で、その代わりアバウトでいい加減だ。その証拠に汽車のダイヤは滅茶苦茶ではないか、と言うのは通説である。しかし伊半島の官僚主義は世界に冠たる特技である。彼らにとって芸術やファッション、スポーツと並んで官僚主義は立派な輸出産業である。当然のことながらバチカンが2000年もの間、世界のカトリック教会を統合し得たのもこの特技に負うところが大きい。恐らくはバチカンが欧州の他の国にあったならカトリックの一体化は不可能であったろう。

私は留学当時、ひょんな事からミラノの地下税関に3日間拘束されることになった。その時つぶさに官僚主義とはどういうものかを目撃した。日本にはこういう事例がないから想像できないであろう。それはもう恐ろしい光景だった。こういう関税的な武器（関税障

壁)があれば、食品の安全問題など一挙に解決できる。相手国は勿論同じ武器を使って対抗する。

ところでこの重厚な官僚主義に反発する形で「自由な感性主義」も育ってきた。イタリアオペラや A.C.ミランもこの官僚主義に反発する形で、あるいは共存する形で花開いた。その意味では官僚主義もマイナスばかりではない。

日本もバチカンの官僚主義の影響下にあるが、果たしてそれがプラスに効いているのか或いは逆なのか判断が難しい処だ。日本の教会文化の評価も地域によって分かれるが、首都圏の新しい教会について言えば文化と呼べるほどのものは未だ育っていない。外部に見せるものがバザー程度だというのは寂しい限りである。今後着実に教会文化を高めていくには上記の教義の問題点に関する活発な議論と、集団主義からの個人の開放が鍵であると思うが如何であろうか？

6 . 自分の戒律を持つ

人間が社会的生き物である限りルールを守ることは必須である。しかし日本には既に無数の道徳的規範が存在し、人々は良くこれを守るからこれ以上の集団の規律を設定する必要はないと思われる。問題は律(生活のリズム)である。日本という国は春夏秋冬の季節の変化がかなり正確に訪れる。国の祝祭日はこのリズムを具体化したものだから、それを守る限り国の文化に同期する。これが集団主義に陥る原因の一つらしい。

信仰のプロを養成する修道院では、カトリック暦に厳格に従って生活している。しかし一般の平信徒にとってこれは真似出来ない。それではどうするか？それには個人の定休日を一つ持つと言いたい。

話は飛ぶが、ミシェランのガイドブックで東京版と伊版でレストラン(特に一つ星)の定休日を調べてみると面白い。東京では年中無休か、或いは国の定めた祝祭日に従う店が多い。一方イタリアのボローニャ辺りの店を調べみると全く訳の判らない日が休日として指定されている。私の体験では彼らはそれを厳格に守っているようだ。察するに個人的に重要な日とは両親の命日とか洗礼名の聖人記念日であるかもしれない。その日は幾ら仕事が忙しくてもその儲けのチャンスを放棄して店を休む。その効用は明らかだ。個人の律を守ることで集団主義から解放された自分を発見するのだ。

日々の生活の律の中で、教団が用意するバスに便乗すれば確かに人生の手間はかからない。しかしそれでは文化は育たない。漫然とした集団主義の中で特別の自分を発見することが出来て始めて、他者と主体的に付き合えるのではあるまいか？